ぼくは８８８

作者名：のんのん　都（ペンネーム）

課題 ①… 表紙

①
ぼくの名前は８８８。
ハッピャクハチジュウハチじゃなく、８が３つのハチミツだ。
人よんで、スーパートリプルエイトとは、ぼくのことさ。
どんな食べ物もグーンとおいしくして、だれをも笑顔にする不思議な力をもっている。

②
ぼくのふるさとは、山のふもとのアカシアの森。

③
たくさんのミツバチたちに少しずつ集められて、ねかされて、あまい、あまい、金色の８８８になったのさ。

課題 ②

④
今、ぼくは町のレストラン、「ハニー」でおじさんとおばさんと暮らしている。はちみつ料理を食べに、毎日いろいろなお客さんがやってくる。

⑤
「ハニーレモンスカッシュ、４つと、ハニーマスタードチキンが３、しょうが焼き、１です」と、おばさんの明るい声。
「ハイよ」ウキウキしたおじさんの声。

⑥
おじさんは、ガラスのコップをならべ、レモン汁と８８８と氷とサイダーをそそぐ。それから８８８としょうゆと粒マスタードをまぜたタレに鶏肉を、８８８としょうゆとお酒としょうがをまぜたタレに豚肉をつけこんだ。
どれもこれもぼくの出番だ。

⑦
「さあ、おいしくなーれ。おいしくなーれ」
おじさんの呪文でおいらは元気１００倍。
すっぱいレモンちゃんとは、いつものあまい、くるくるダンス。
お肉はつついて、くすぐると大笑いしてやわらかくなる。
ジュージュージュー、香ばしいニオイがたちこめる。

⑧
ある寒い日、お店に見かけぬお客さんがやってきた。
フードつきの長いコート、毛皮のブーツと手袋に白い大きなマスクをして、細い目だけが光っている。すみっこの席に背中を向けてすわると
「は・ち・みつ・ホットミ・ルク」と小さな声で注文した。

課題 ③

⑨
ちょっと、あやしいお客さん。
おじさんもおばさんもキョロキョロとのぞきこむけど、お客さんはコートもマスクもはずさない。手袋もしたまま、両手でカップをはさんでいる。そして、みんながちょっと目をはなしたすきに、一瞬、マスクをずらしてミルクを一口。

⑩
「うわー」
８８８だけが見たその顔は、口が耳までさけた山のケモノだ。

⑪
ケモノのノドはザラザラ真っ赤にはれている。ゴクンと飲み込まれた８８８ホットミルクは、金色のトロトロパワーで、ばい菌をやっつけ、荒れたノドのかべをなめらかにしてやったよ。

⑫
「ゴチ・ソ・ウ・サマ。コホン。コホン」
「お風邪ですか？　ノドの痛みにはハチミツがよくききますよ。よかったら、これ、おまけです」
おばさんは、引き出しから、小さなハチミツのビンをさしだした。

⑬
お客さんは小さなビンを受け取り、お札を出した。おばさんが、おつりを計算して振り返ると、お客さんもお札もなく、葉っぱが一枚だけ残っていた。

⑭
しばらくして、レストランの前にアケビと山ブドウがドッサリおいてあった。
「おいしいミルクとハチミツありがとう。ノドもすっかりよくなりました」と手紙があった。

⑮
「この前のお客さんかな？」おじさんとおばさんは顔を見合わせ、ぼくをナデナデした。ぼくは、いっそうピカーっとかがやいた。